

日本語オノマトペの仏語訳研究  
-宮澤賢治童話を資料として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬川, 愛美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22272">http://hdl.handle.net/10291/22272</a>

# 2021年度 教養デザイン研究科

## 博士学位請求論文（要旨）

### 日本語オノマトペの仏語訳研究

#### — 宮澤賢治童話を資料として

教養デザイン専攻

瀬川 愛美

#### 1. 問題意識と目的

「オノマトペ」という学術用語は、フランス語の *onomatopée* から借用した外来語である。日本語学において、オノマトペという術語が指す対象は、「音」のみならず「声」「さま」に関する語などがある。一方で、フランス語においては、基本的には「音」に関する語のみを指し、日本語の擬態語に当たるものは想定されておらず、日本語とフランス語では、指し示される範囲が異なっている。

日本語のオノマトペは、ある基本要素が元になり、それらが加工されたり展開されたりすることで、実際の文の中に様々な形で運用されるところに特徴がある。また、オノマトペが加工、展開されて文中に現れる形にはパターンがあり、それらのパターンは大まかに、次の4種類にわけることができる。オノマトペの基本要素を{X}とすると、促音「っ」が付加する「Xっ」型、撥音「ん」が付加する「Xん」型、「り」が付加する「Xり」型、{X}の繰り返しの「X×2」型である。それぞれの形式には、特性やニュアンスがあるとされる。

しかし、日本語オノマトペの形式が持つニュアンスがどのように仏語訳されているのかという視点に立った研究は、管見の限りではあるが、未だ行われておらず、本論文が初めての試みとなる。また、日本語オノマトペがどのようなフランス語にあたるのかを知るための日仏対照オノマトペ辞典のようなものやコーパスも存在していない。さらに、日本語オノマトペは、フランス語を母語とする日本語学習者にとって最も難しいものの一つであり、この傾向は初級の学習者のみならず、日本語からフランス語への翻訳を生業にする人にとっても、例外ではない。そのような性格を持つ、日本語のオノマトペに、フランス語がどのように対処するのかという問題を考えることは、重要なものといえる。

宮澤賢治の作品に見られるオノマトペは、その総数が多いことはもちろん、形式や種類が豊富であり、オノマトペの多彩さが群を抜いている。標準語的なオノマトペと非標準語的（方言的）なオノマトペの双方が見られるが、標準語的なものが大部分であることから、賢治の作品においては、かえって、俚言性や古態性があるオノマトペ、賢治独自のオノマトペが際立つとされる。宮澤賢治の作品を研究対象にすることで、多くの標準語的なオノマトペを分析することが可能になり、オノマトペの形式や種類によって、仏語訳に傾向があるのか、考察できる。また、非標準語的なオノマトペによって、微妙なニュアンスが表現されていることから、それが、仏語訳でどのように表されているかを見ることにも意義を見出すことができる。

## 2. 構成及び各章の要約

本研究は、以下のような構成で行った。

まず、第1部第1章では、本研究の目的、日仏オノマトペの定義、オノマトペという術語を使用する理由、研究方法を述べた。第2章では、翻訳の観点、対照言語学の観点、日本語教育との接点、学際的研究の立場から、本研究を通して、またその結果として期待できることを指摘した。第3章では、宮澤賢治オノマトペの特性、宮澤賢治仏語訳の諸本と、宮澤賢治仏語訳の解説本を提示した。第4章では、日仏オノマトペ対照の研究史展望を概観して整理した。

第2部では、宮澤賢治の作品とその翻訳本である *Hélène Morita* によるフランス語版を分析した。第1章では、『ゼロ弾きのゴーシュ』と *Gauche le violoncelliste* を用いて、原文のオノマトペの頻度と形式、日本語オノマトペの形態的パターンごとの仏語訳、特異な日本語オノマトペの訳出、原文の擬音性・擬態性と仏語訳出の文法性の対応を検証した。第2章では、『銀河鉄道の夜』と *Train de nuit dans la voie lactée*、第3章では、『風の又三郎』と *Matasaburo, le vent* について、第1章と同様の方法で調査した。

第3部第1章では、Coseriu, E. (1978) の翻訳についての所論をもとに、翻訳の定義と評価の基準を記した。第2章では、基本要素末の促音と促音付加・挿入の仏語訳、第3章では、基本要素末の撥音と撥音付加の仏語訳、第4章では、「り」付加の仏語訳、第5章では、長音付加と挿入の仏語訳、第6章では、繰り返しの仏語訳を評価した。終章では、第2章の結果を総評し、日本語オノマトペ仏語訳の注意点を考察した。

調査・分析を行った結果として、以下のような結論が得られた。

第1部第1章では、オノマトペという術語の指示範囲が、日本語とフランス語で異なっているため、日本語のオノマトペを仏語訳する際には、普通の言葉で詳しく説明するか、あるいはニュアンスのよく似た語で代替するしか方法がないということになると指摘した。第2章の日本語教育に関しては、日本語オノマトペの説明の難しさ、日本語教育の教科書『みんなの日本語』シリーズにおける説明に触れた。教科書では詳しい説明が不足し、取り上げられているオノマトペの形式が限られていることから、多くの改善が見込める。第3章では、宮澤賢治の作品のフランス語翻訳本は27冊あり、10名の翻訳者によって、全59作品が訳されていることがわかった。賢治の童話作品は、単に平易な子供向けの物語とは異なり、独特の文学性を有する文体であることから、賢治の世界観を表すのに、どのレベルの言語を使用するのかが、全体として課題となる。第4章では、日仏オノマトペ対照研究は、辞書の記述やフランス語の語句の語源や音韻に注目した研究、フランス語のオノマトペが出現する絵本や漫画、童話等の事例をあげて、日本語と比較した研究、といった大まかにふたつの流れに分けられた。

第2部第1章の『ゼロ弾きのゴーシュ』と *Gauche le violoncelliste* では、もっとも多く見られた形式は「×2系」であり、また、「×2系」を展開したのものとして、「X×4」「X×2+X×2」「X×3+Aっ×5」という3つのもの形式が見られ、繰り返しのオノマトペが多いことが指摘できた。擬態語が過半数を占め、単語だけで訳出されずに句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」「音・さま」に偏っていた。特異と思われたオノマトペ6種類には古態性があるものがあり、宮澤賢治独自のオノマトペは2種類であった。第2章の『銀河鉄道の夜』と *Train de nuit dans la voie lactée* では、「×2系」を展開した「X×4」には、擬音語のみならず擬態語も出現した。日本語オノマトペのうち、擬態語が非常に高い割合を占め、ひとつの単語ではなく句を用いて訳出されているものの数値は、「さま」に偏っていることが分かる。特異と思われたオノマトペ5種類のうち、2種類は方言性を持つものであり、宮澤賢治の独自のオノマトペは3種類であった。第3章の『風の又三郎』と *Matasaburo, le vent* では、「×2系」を展開した「X×3」「X×4」という2つの形式が見られ、繰り返しのオノマトペが多いことが指摘でき、さらに、「挿入系」には、促音挿入の「AっA」、長音挿入の「Aーっ系」「Aーん系」「Aーん×2系」という4つの形式が観察された。日本語オノマトペのうち、擬態語が過半数を占め、単語よりも句を用いて訳出されているものが若干多かった。特異と思えるオノマトペ12種類のうち、1種類は方言性があり、もう1種類は古態性と方言性があるものであった。

第3部の第1章では、翻訳とは、翻訳対象となっている言語のもともも持っていた「素材関連」と「意義」とを、別の言語において、同等に再現すること、と定義した。これを、宮澤賢治のオノマトペに即して言えば、それが、「素材関連」と「意義」、すなわち、「指示対象（出来事）」と「特別なニュアンス」の両側面から、フランス語に再現しえているのかが、評価のポイントとなる。第2章から第6章では、日本語オノマトペの形式ごとに仏語訳を評価した。第2章の基本要素そのものの末が促音であるオノマトペは、ほとんどの例において〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉という3つのニュアンスのうち、ひとつを持っている、もしくは、2つのニュアンスを持ち合わせているものであった。これに当てはまらないのは、どちらも、ある状態に定まって動かずに保っているという〈固定性〉というニュアンスがあるとみなせた。基本要素に促音付加しているオノマトペは、〈瞬間性〉と〈急転性〉のニュアンスを持つものが多数であり、その他は〈一区切り性〉のニュアンスがあり、仏訳では不定冠詞 *un/une* を伴うことで〈一区切り性〉を表わしている例が見られた。基本要素に促音挿入しているオノマトペ、基本要素に「促音挿入/り付加」しているオノマトペの促音は、〈時差性〉や〈滞留性〉のニュアンスを表しているものであった。第3章の撥音付加は、〈余韻性〉と〈残存性〉のニュアンスを持つ。〈残存性〉が訳出されているものもあったが、〈余韻性〉が訳された例は少なく、フランス語では〈余韻性〉を表現することは、難しそうであることが示唆される。第4章の「り付加」は、〈完結性〉〈ひとまとまり性〉のニュアンスを持つ。〈完結性〉と〈ひとまとまり性〉のどちらか一方のニュアンスだけが翻訳されたものはなく、双方の訳出に成功する場合もあり、不成功の場合もあると判断できた。第5章の長音は、〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスを持つ。仏訳では、過去の状態を表す半過去の動詞を用いることによって、〈延長性〉と〈持続性〉のニュアンスが表されている例が見られた。第6章の繰り返しのオノマトペは〈反復性〉のニュアンスを持つ。原文のオノマトペが「声」に関わると、〈反復性〉のニュアンスが訳出されていなかった。また、繰り返しの形式で方言性を持つオノマトペとその仏語訳は、描写されている出来事が異なっていた。

終章では、今後の課題として、宮澤賢治の他の作品や、宮澤賢治以外の作品と仏語訳の比較を継続し、得られた結果を翻訳や教育に活かす方法を考えることなどが必要であることを述べた。